

月影

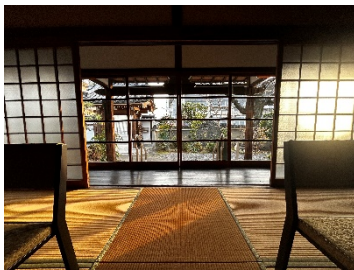


第80号

令和七年二月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院



幸せは
築くものではなく
気づくもの



無いものを数えると
不満が生まれ
心は貧しくなる

有るものを数えると
感謝が生まれ
心は豊かになる

小さな気づきが
大きな幸せとなる

仏事と

作法

仏壇 (一)



仏壇は仏さまをお祀りする厨子です。

金箔などを使い極楽浄土を表しています。仏壇は家庭生活の中心的存在です。したがって仏壇を安置する場所は、人の寄りつかない部屋ではなく、家族が常に集まる部屋に安置することが望ましいです。

日々、仏壇の前に座り、阿弥陀仏、ご先祖さまに向かって合掌することは、命のつながりを考えること、自身を省みることになります。忙しい日常の中でも尊い時間となります。



法然上人 阿弥陀如来 善導大師

ご本尊の祀り方

私たちの宗派（浄土宗西山禅林寺派）の本尊は阿弥陀仏です。

仏壇の最上段に阿弥陀仏をお祀りします。阿弥陀仏の左脇（向かって右）に善導大師（または観音菩薩）、阿弥陀仏の右脇（向かって左）に法然上人（または勢至菩薩）をお祀りします。

位牌の祀り方

お位牌は、阿弥陀仏をお祀りしている段より一段下げてお祀りします。向かって右側が上座です。先祖代々の位牌や古い位牌は右側に置きます。

しかし、仏壇の大きさや位牌の数によって思うように置けないうちもあります。その場合は置きやすい所に置きましょう。

（つづく）





月影の

いたらぬ里は
なけれども
ながむる人の
こころにぞすむ

法然上人

夜空に浮かぶ月。
その光は太陽の光と正反対で、
静かでやわらかく、仰ぎ見てい
ると、心が癒されていくよう
です。

法然上人は、阿弥陀仏の慈悲
を月の光に例えて、この歌を詠
まれました。

月の光の届かないところはな
く、すべての人々を照らします。
阿弥陀仏の慈悲も、月の光のよ
うに、すべての人々を一人も漏
らすことなく包み込みます。

月の光に気づき「美しい」と
月を眺めている人の心に、月の
光がますます澄んで見えるよう
に、阿弥陀仏の慈悲に気づき
「ありがたい」と想う人の心に、
阿弥陀仏の慈悲は宿っていくの
です。

【慈悲】

仏・菩薩が衆生をあわれみ、
いつくしむ心。万人に対する
愛。いつくしみと同情。

「慈」は樂を与える意。

「悲」は苦を取り除く意。

天台では慈は父の愛にたとえ
られ、悲は母の愛にたとえら
れる。



仏教歳時記

涅槃図の 虎も 涙す 釈迦の 裾

石井大泉

涅槃図は、お釈迦さまが入滅された旧暦二月十五日に勤める涅槃会の時に掛ける掛け軸のことです。

お釈迦さまの入滅を悲しみ、弟子をはじめ、鳥や獣、虫や魚にいたる多くのものが、お釈迦さまを囲み、悲しみに暮れる姿が描かれています。

お釈迦さまは、頭を北に、顔を西に向けて横たわっておられます。

死者を北枕に寝かせるのは、お釈迦さまの涅槃の姿に倣っているのです。



雑記抄 く心のどかに

以前、至らない自身を嘆かれ、どうすれば悟りを得ることができるとしようか？と尋ねられたことがありますが▼悟りを得ることができるのはお釈迦様だけです。私たちが凡夫は煩惱を抱えながら、思い通りにならない毎日を過ごしています。自身を省みて至らない自分に気づき自覚することは、私たちにもできる「凡夫の悟り」と言ってもいいのかもしれない▼「この世は苦である」とお釈迦様は仰いました。老いたくなくても老い、病になりたくなくても病に

なり、長生きしたくても寿命はやって来ます。人生、思い通りに生きることはできないのです▼歌人、窪田空穂は「老いぬれば 心のどかにあり得んと 思いたりけり あやまりなりき」と詠いました。老いると煩惱も無くなり、心も穏やかになると思っていたが、それは間違いだったと言っています。煩惱は命終わるまで無くなることはないのです▼無いものを数えると不満が生まれ、有るものを数えると感謝が生まれます。煩惱を抱えながら、少しでも感謝多き人生を送りたいものです。